

三月の窓から

▲奥深い甲斐の國の音樂的な統一を保持してゐる自然の姿態、白雪を頂いた崇高な山姿はいつのまにか處々に古株があらはれたり、若々しい芽生が軟風にしなだれたりするようになってしまつた、其面を黄金色の日光がしづかに滑つて動く、眺めてゐる人の心もふわふわと軽い波を打つ風物にも人の顔にも冴えて明るい色が現はれる、地の色も若草を萌すやうな懐しい潤ひが出てくる。然ししめつてゐるやうで露けのないのが如何にも春の心の如く感ずる

斯様な穩かな平和な自然の姿態から一度人間の世界を眼そむけると、そこは狂亂である、渦巻である、混頓である。労働だ、事業だ殖産だ、工藝だと騒ぎ立つてゐるのが殊に目立つ。此の叫びは人類の思想にも影響を與へずには置かない、其證據にはどんな雑誌にも政治問題や産業問題の載せられないものは一つも見あたらぬではないか、

然し今私は約四十種類の學生の原稿を手にしたがさすが超世脱俗の氣風が漲つてゐる延嶺だけに、斯様な産業論がなかつたといふことは、悲しいやうにも思つたが又非常に嬉しくも思つた蓋し、人間は何んな方向へでも徹底すれば必ずあらゆるものと融會融和する境地が開かれ春心がいつも人間にまつはつて離れないと信ずるからである、

▲此雑誌は聖誕七百年記念號として花々しい作品を集めて世の中へ擔ぎ出すつもりであつたが、此雑誌の性質上、それは全く止めて、部員の内心に深く深く刻込むといふ主意をとつた、そして編輯の都合から全原稿の中十五六通ばかり割愛せねばならなかつた、岡君の生活の情味、福島君の信仰の力、堀内君の青年の航路、和田君の親子天性、富田君の第二の日蓮を望む、森君の大日本帝國と日蓮聖人、渡邊君の三樂、小林君の日記帳から、松井君の聖誕七百年を迎へて我等が希望下田君の秋の夜半、南陽君の永生の友、戸田君の聖誕七百年を詠む短歌、などがそれである。讀者諸君に

お許しを願つて置く。

▲始め、原稿を評論、宣傳、感想、創作と分類してみたが、どの原稿も何れともつかず、分類はやめて並列してしまつた、しかし、それが爲め雑誌の統一を欠く憂はないと思つたからである。尙、編輯上のことに就いては、絶えず部員諸賢の御批評や御希望をいたしたい。

▲私はエゴイストだといふことは能く知つてゐる知つて居るが而もそれを止めたくない、いつまでもエゴイストでありたい、友人や長者といつても對角線をなしてゐる、然ししかし、私には唯一の友がある、それは自然である、私が笑へば自然も笑ふ、私が泣けば自然も泣く、私がのんびりした気分になれば自然ものんびりする。くつきりとした若草の青味を見ると私も亦何物かを創造せねばならない気分になる。(かなめ)

